様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2021
課題番号：１６Ｋ１６９６１

研究課題名（和文）地方都市商店街の誕生と終焉に関する民俗学的研究：1920-2020

研究課題名（英文）An Ethnographic Study on the Birth and Demise of Local Urban Shopping Streets: 1920-2020

研究代表者
塚原　伸治（TSUKAHARA, Shinji）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：３０７３５５６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、具体的な地方都市商店街の事例研究を通して、商店街の誕生と展開、そして終焉を迎えつつある現在までを100年のスパンで描き出した。特に、以下の3点を明らかにした。(1)商店街が過去を引き継ぎながらも様々な偶然に導かれて成立したこと。(2)20世紀後半に商店街が展開したプロセスは、必ずしも長期的な安定ではなく、予想以上に不安定な状況のつながりとしてあったこと。(3)商店街が衰退し終焉に至った筋道は、約40年間にわたる長期的な変化の結果であり、商店主たちによる社会関係や家業継承をめぐる軋轢などを反映していること。

研究成果の学術的意義や社会的意義
商店街という対象には近年急激に関心が向けられつつあるが、成果の中心は政策や制度の運用についての関心にもとづく歴史学的研究であり、現地調査による現状把握の研究は乏しかった。また、そのような研究方法に起因して、個々の商店主がどのような関係の中でどのように生きているのかという点にまで迫った研究は行われていなかった。それに対して本研究では、歴史学的手法と民俗誌を組み合わせることで、学際的な商店街研究に新しい視点をもたらすことができた。

研究成果の概要（英文）：Through case studies of specific local city shopping malls, this study depicts the birth and development of shopping malls over the span of 100 years to the present day, when they are coming to an end. In particular, the following three points were clarified. (1) Shopping streets were established by various coincidences while inheriting the past. (2) The process by which shopping arcades developed in the latter half of the 20th century was not necessarily a long-term stable one, but rather a link in a more unstable situation than expected. (3) The path that led to the decline and demise of the shopping district was the result of long-term changes over a period of about 40 years, and reflected social relations among shopkeepers and conflicts over the succession of family businesses.

研究分野：民俗学

キーワード：商店街　地方都市　近現代史　民俗誌　福岡県　千葉県

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)先行研究―商店街の「誕生」―

従来、商店街に関する研究の関心は、商学や経営学を中心として、計量的な分析に集中してきたが、研究開始当初の時期、社会学や歴史学を中心とする人文系諸科学においても、目覚ましく関心を集めるようになっていた。2010 年以降、立て続けに関連の成果が公刊され、ようやく人文系諸分野における商店街研究は端緒についていた（新 2012、満薗 2014、満園 2015 など）。そのような動向のなかで、以下のようなことが明らかになってきた。第一に、商店街という理念が生まれたのは 1920 年代のことであり、伝統的なイメージに反して 100 年の歴史しかないことである。第二に、商店街の「誕生」の背景には都市への人口流入にともなって急増する零細小売商の救済をはじめ、社会問題の解決という喫緊の課題があったことである。商店街は特有の状況において特有の使命をもって「誕生」させられたものなのである。

とはいえ、商店街の「誕生」について論じてきた先行研究は、理念としての商店街が政策としてどのように発案されたかという点に焦点を絞っており、個々の地域の具体的な文脈において商店街がどのように生まれ、役割を果たしてきたのかについては研究蓄積に乏しいといわざるをえず、先行研究においても緊急の課題として指摘されている（満薗 2014）。

(2)研究代表者（筆者）の研究成果―地方都市商店街の現代的状況―

筆者は、以前に手掛けていた老舗研究を発展させる形で、2014 年頃より日本の地方都市（千葉県香取市、福岡県柳川市）の商店街においてフィールドワークを実施し、商店街の現代的状況に関して以下のようなことを明らかにしてきた（科研費（研究活動スタート支援）「地方都市商店街の現代的状況に関する民俗学的研究」、2014 年度～2015 度）。

【商店街の「伝統」化】　実際には昭和初期に誕生したものであるとはいえ、すでに世代交代を経験した当事者たちにとって、商店街は「伝統」とみなされている。その結果として、実際には個々の商店の流動性が高いのにもかかわらず、商店主や顧客の心理的な抵抗によって新しい商売方法の導入が失敗することもある（柳川市の事例）。事実としての長い歴史を持たずとも、それが伝統と認識されれば十分な拘束性を発揮するため、商店街はすでに伝統としての価値と桎梏の両面をまとっているといえる。

【諸アクターによる商店街の資源化と在住者の葛藤】　商店街の商店主は今でも職住一致であることが多い。必然的に近年では、商売を辞めながらも、そこに住み続ける者も一定数生じている。ところが商店街は当事者のみならず、行政、研究者、コンサルタントなどの多様なアクターがそれぞれの思惑を持って参与する場となっており、それらのアクターが目標とするのは、既存の商店街が商業地区として復活することである。小売店を辞めたあとも自宅として商店街に住み続ける住民の存在は、「シャッター商店街」言説のなかで不可視化されている。これらの在住者たちは商売を再開する選択肢も余所に移り住む選択肢も閉ざされた中で、葛藤していることが多い。この点について筆者は商店街を資源化する諸アクターの動きから明らかにしてきたが、今後は、不可視化されてきた在住者の視点も含めて理解する姿勢が不可欠である。

２．研究の目的

(1)課題

以上に挙げた先行研究および筆者の研究成果から、以下のような課題が浮上した。

第一に、理念としての商店街の誕生が論じられてきた一方で、個々の商店街がいかなる需要に基づいて誕生し、どのような役割を担ってきたのかが明らかになっていないことである。

第二に、商店街の「終焉」について正確に理解する必要性である。商店街が都市の人口増加対策と零細小売商の救済という特定の目的に沿って誕生した以上、当初の役割はすでに終えている。それでもなお小規模小売店の持続・再生について検討するためには、一度、商店街の「終焉」を自覚化し、吟味することでその遺産を相続することを考えなければならない。

第三に、商業地区としての役割を終えつつある「シャッター商店街」を、研究の対象とする必要性である。閉店したままの店舗が目立つようになったシャッター商店街は、「商店街＝伝統」というまなざしや、「商店街の活性化」というスローガンのもと、等閑視されるか、あるいは所与の悪とみなされる傾向にある。しかし、商店街を当初の姿のまま「保存」することを目的としない場合、「シャッター商店街」と呼ばれる状況が必ずしもネガティブな結果であると断言できない。生活者の視点から商店街について理解する場合、「活性化」を目指す人々だけではなく、商売を辞めてもなお商店街に留まり続ける人々について理解すべきである。

(2)対象

そこで上記 3 点の課題に答えるため、研究期間内に以下を明らかにすることとした。

第一に、具体的な商店街の事例研究を通して、商店街の誕生と展開、そして終焉を迎えつつある現在までを 100 年のスパンで描き出す（歴史的手法：第一、第二の課題との対応）。

第二に、「シャッター商店街」と呼ばれる地区に現在も住民として住み続ける人々を含め、現在の商店街という場所について民俗誌的に描き出す（民俗誌的手法：第二、第三の課題との対応）。人々がなぜそこにとどまり、地域とどのような関わりをもち続けているのかを理解することで、シャッター商店街という問題系そのものを問い直す。

すなわち、これまで筆者が明らかにしてきた地方都市商店街の現状理解をさらに展開させることで、①商店街の終焉までを視点に入れた歴史を描くこと、②現在の商店街の実態を把握するために、そこに住む人々の視点から民俗誌を描くことを目的とするのである。

３．研究の方法

本研究は、前項の目的に照らし、（１）現地調査（聞き取り調査、参与観察、史料調査）（２）文献研究という 2 種の研究手法を並行して実施した。研究フィールドである福岡県柳川市と千葉県香取市という 2 地域の商店街は、研究代表者が以前より調査を行ってきた地域である。遠隔の 2 地域の比較研究というのは慎重を要するものであるが、都市としての人口規模や商店街の構成などの条件の近い 2 地点を選択しており、これまでの研究成果との連続性をふまえて十分な成果を期待することができるものである。

４．研究成果

(1)商店街の誕生

2000 年前後の商店街をひとつの時代の「終焉」と位置づけ、誕生から終焉に至る 20 世紀の約 100 年間を、福岡県柳川市と千葉県香取市において具体的な史料と聞き取り調査によって検討してきた。その結果、商店街成立の経緯において、先行研究が重視していた政策的な課題解決よりも、現地の人々が同時代的に経験していた些細な生活変化の積み重ねが重大な影響を及ぼしていたことが明らかになった。

特に目覚しく研究成果をあげたのは福岡県柳川市の事例研究である。地元紙『柳河新報（柳川新報）』の記述や、柳川商工会による『柳川商工案内』などから商店街の成立にかかわる具体的なプロセスが明らかになった（塚原 2018 など）。

(2)店頭販売と買い物空間の創出

柳川では御用聞き、掛け売り、客ごとの価格設定を前提とした商慣習が前提となっていたため、店舗が買い物空間になるためには、現金即時決済が成立する必要があった。この変化は近代的な商慣習の普及であると理解することができるが、その普及はスムーズなものではなかった。最終的に後押しをしたのは 1923 年に発生した関東大震災であった。震災のあった翌月の『新報』には、震災の発生によって、京阪方面の問屋や卸売から支払いの督促が厳しくなったため、旧慣の二季決済を取りやめ、現金払いか少なくとも月末払いにするよう商工会で決議したという内容の記事が掲載されており、約半年後にはすでに一般化していることを示す記事が掲載されている。

また、ショーウィンド（飾窓）についての記事、あるいは店頭装飾競技会に関する記事からは、1920 年代以降に各商店が店先で商売をするように転換したことが判明した。また、そのような転換がもたらした結果として、通りの美観と使いやすさを商店主たちが求めるようになったことも明らかになった。地元住民の交渉の結果、1930 年に瀬高町の通りの街路拡張と舗装工事がおこなわれた。瀬高町は京町と名前を変え、「柳河銀座」という表現もこの頃見られるようになった。このようにして、「商店街らしい」外観が整えられていったのである。

(3)商店主たちの横のつながりの形成

商店街が成立する上で、買い物空間が生み出されることと同じくらい重要なのは、店主たちの横のつながりであった。その前提には、1920 年代に九州で猛威をふるい始めた百貨店や、呉服店の新業態の影響があった。福岡や久留米の呉服店や百貨店が出張大売出しと称して柳川で特売をはじめると、柳川の商人たちは、結託して「対抗大売出し」を開始した。出張大売出しとそれに対する対抗大売出しが一～二年続いたのちに、柳川ではじめての商店街組織である「京町大店会」が誕生した。このことは商店街誕生の直接の因果関係とまではいえずとも、商店街の直前期の重要なできごとであったことは主張可能である。

(4)商店街の展開

商店街が誕生した後にやってきた強い統制の時代（一九四〇年代前半）も、戦後復興の時代（一九四〇年代後半）も、あるいは高度経済成長の時代（一九五〇年代～一九六〇年代）も、柳川という地域における小売業は、商店街を舞台として、あるいは商店街を単位として経験されることになった。その具体相を明らかにした。

また、商店街が衰退し終焉に至った筋道は、約 40 年間にわたる長期的な変化の結果であり、商店主たちによる社会関係や家業継承をめぐる軋轢などを反映していることも明らかになった。

大規模小売店の登場によって商店街が衰退したという単純な因果関係にはないのである。

(5)成果公開

本研究の成果は、すでに公開されているものだけではなく、書き下ろしの単著として刊行される予定である。すでに出版社と具体案について検討しているところであり、可能な限り速やかな出版を目指している。

新雅史 2012『商店街はなぜ滅びるのか―社会・政治・経済史から探る再生の道―』光文社新書
塚原伸治 2018「商店街前夜―買い物空間の創出と商店主たちの連帯―」浪川健治・古家信平編『江戸―明治 連続する歴史（別冊 環 23）』藤原書店
満薗勇 2014『日本型大衆消費社会への胎動―戦前期日本の通信販売と月賦販売―』東京大学出版会
満園勇 2015『商店街はいま必要なのか―「日本型流通」の近現代史―』講談社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Tsukahara Shinji	４．巻 9
２．論文標題 Displaying Mythological Characters: Changes in the Meanings of Decorations in the Sawara Grand Festival in Chiba, Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Religion in Japan	６．最初と最後の頁 10-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/22118349-00901003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 塚原伸治	４．巻 46
２．論文標題 芸能としての祭礼―「佐原の大祭」における美の追求―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 社会人類学年報	６．最初と最後の頁 31-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 塚原伸治	４．巻 67
２．論文標題 関係のなかで民俗芸能をとらえ直す―もの、偶然性、意図されなかった結末―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 民俗芸能研究	６．最初と最後の頁 61-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 塚原伸治	４．巻 69
２．論文標題 偶然のマルチサイテッド・エスノグラフィー	５．発行年 2016年
３．雑誌名 千葉史学	６．最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　9件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 塚原伸治
2．発表標題 破壊され、焼き尽くすための芸術―祭礼アートとしての造り物論―
3．学会等名 「野の芸術」論研究会第5回研究会（招待講演）
4．発表年 2020年

1．発表者名 塚原伸治
2．発表標題 商人たちの生活世界をいかに記述するか－商店街の民俗学的研究について－
3．学会等名 第27回価値共創型マーケティング研究会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 塚原伸治
2．発表標題 老舗の伝統の近代―家業経営のエスノグラフィー―
3．学会等名 2019年度組織学会年次大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 塚原伸治
2．発表標題 関係のなかで民俗芸能をとらえ直す―もの、偶発性、あるいは後景化する身体について―
3．学会等名 民俗芸能学会平成30年度大会（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 商店街の少し短い20世紀―ポスト「三丁目の夕日」時代の地方都市をめぐって―
３．学会等名 第1回「人と地域」研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 祭りとメディアの民俗学―「佐原の大祭」における新たなメディアの活用をめぐって―
３．学会等名 シンポジウム「メディアが生み出すもの／残そうとするもの―メディア人類学のフィールドから」（北海道大学国際広報メディア・観光学院院内科研プロジェクト）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 歴史を奏でる人々―佐原囃子をめぐる歴史実践―
３．学会等名 日本民俗学会第69回年会
４．発表年 2017年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 祭りに魅了される人々―「民俗」にはまるのは誰か―
３．学会等名 現代民俗学会2016年度年次大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 交換と社会関係―民俗学、あるいは社会に埋め込まれた経済―
３．学会等名 マーケティングと文化人類学の横断的検討に向けた特別研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 商店街の誕生と終焉―地方都市商店街の100年―
３．学会等名 日本民俗学会第68回年会
４．発表年 2016年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 商店街の時代―地方都市小売業の20世紀―
３．学会等名 第144回比較民俗研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 塚原伸治
２．発表標題 老舗商家と伝統
３．学会等名 第1回ふみの森もてぎ歴史フォーラム（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

1．著者名 藤野陽平、奈良雅史、近藤祉秋、堀田あゆみ、吉田ゆか子、原知章、大道晴香、小林宏至、市野澤潤平、田本はる菜、塚原伸治、アルベルトゥス＝トーマス・モリ、久保明教、櫻田涼子、高山陽子、飯田卓	4．発行年 2021年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 280
3．書名 モノとメディアの人類学	

1．著者名 塚原伸治	4．発行年 2019年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 479（413-417）
3．書名 『パブリック・ヒストリー入門―開かれた歴史学への挑戦―』（菅豊・北條勝貴編著,「歴史を刻む音楽―ある祭り囃子の「成長」― 」を分担執筆）	

1．著者名 塚原伸治	4．発行年 2017年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 232（153-168）
3．書名 『多文化時代の観光学―フィールドワークからのアプローチ―』（高山陽子編, 「都市に生きる伝統―千葉県佐原の町並みを中心に―」を分担執筆）	

1．著者名 塚原伸治	4．発行年 2018年
2．出版社 藤原書店	5．総ページ数 336（212-224、230-231）
3．書名 『江戸―明治 連続する歴史（別冊 環23）』（浪川健治・古家信平編, 「商店街前夜―買い物空間の創出と商店主たちの連帯―」「現代の近江商人―近江の商人であり続けること―」を分担執筆）	

１．著者名 塚原伸治	４．発行年 2018年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 368（31-48）
３．書名 『現代民俗学のフィールド』（古家信平編，「民俗学的伝統論の射程―プロセスとしての伝統を中心に―」を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関